

『歴史と記憶』

— 記憶という視点から歴史を切る —

山口 昌 男

平成7年2月11日（於：栄ガスホール）

— 「記憶」および「忘却」の構造的理解の必要性

私の記憶で30年程前に、ほとんどの日本の学生が読んでいた吉本隆明の『共同幻想論』という本がありまして、これについて書評を書評新聞に頼まれて書き始めたんですが、普通、一冊の書評は1回で終わるものですが、連載させてくれとのことで8回連続して書きました。徹底的に批判をしたところ、新聞の内部の人が全員吉本ファンで、「もういい加減にしてほしい」ということで、途中で降板させられたという経緯があります。それを始めたときに、やはりこういう問題は非常におもしろい重要な問題であるけれども、日本の中の老名主みたいにしてやらないで、日本以外のところを含めてどのような仕事があったのだろうか、ということを考えてみてほしかったのです。

フランスのデュルケーム社会学から出てきた考え方で研究をした、モーリス・アルバックスの『集合的記憶』を私は少し前に読んでいました。「共同幻想」という問題は、少なくともそこから始める必要がある。そういう問題に触れながら8回にわたり書いたわけであります。集合的記憶（メモアールコレクティブ）という問題は、私自身も神話を扱うときに非常に大事な視点だということを感じておりました。ところが最近になって、モーリス・アルバックスが今まで全然無視されていたけれども、このごろ欧米で非常に盛んに論じられているということを欧米の学者が言っているのを聞きました。当時、偶然大学の研究室にあったので、それを読んで、吉本というオリジナルでユニークな思想家をいじめてしまったが、あの頃は悪

いことをしたという申しわけなさでいっぱいになりました。その観点というのは、アルバックスはデュルケーム学派の一番不幸な世代の人で、レジスタンスに参加して1945年に解放される前に確か強制収容所で亡くなっているという、悲劇的な生涯を送った人であるわけです。フランスではアルバックスに対する悲劇的な記憶も重ねて、記憶とかその対になる忘れるという点についても研究の対象が広がっています。10年程前に『忘れるということについて』という本が出ているのですが、それは人類学者のレヴィ・ストロースと記号学者のジュリア・クリステヴァなどが研究会を一年間やった末に出た本です。だから、記憶にも構造があるとすれば、忘れるということにも忘れ方の構造がある。私なんか自分のことをその材料とすれば、いくらでもそういう構造は研究できるのではないかと思います。

この2つの問題というのは対になっておりますので、「記憶」ということと「忘れる」ということがどういう関係にあるかということを経験的に考えていかなければならない。私たちが今直面している問題でも、例えば最近の「マルコポーロ」の問題ですが、これは組織的に記憶を消すという運動の一端が日本に現れて、雑誌を廃刊にし、編集長を交代するということまでいってしまった。現在このような問題についてはいろいろな方面に広がっています。つまり、組織的に記憶から消してしまう、ということが問題になってき始めています。一番大きな問題になっているのは、「南京」の問題です。中国側は博物館にしたりして記憶を定着させようとする。日本では、南京虐殺は実際に存在したのかどうかという点で2つに分かれている。昔、私たちが学生の頃、マルクスの言葉がはやって、「ファシストの舌は長く、記憶は短い」と言っていました。ファシストだけが記憶が短くて、社会主義者は記憶が長いというように捏造されて、そういった表現が使われたのです。しかし、スターリンの時代が終わってみると、舌が長くて記憶が短かったのはどちらかというと、そちらの方ではないかというようなことになりました。アウシュビッツをめぐる問題でも、アウシュビッツが解放後

すぐにソ連軍が収容し、それをソ連の政治的に望ましくない連中の強制収容所としたことや、ポーランドの「カチンの森」等の大量虐殺も有名な例でありますけれども、そういう形で記憶を消そうというような動きがあるのです。こういう形で政治の中の記憶という問題はこれからもどんどん取り上げられていくと思います。

日本の近代の学問でも、例えば柳田民俗学はある種の事実を隠している、とこの頃言われている。というのは、柳田民俗学のそもそもの始まりは、台湾や朝鮮といった植民地に対する関わりをもって始まったのに、戦後の民俗学はそういう事実をまったく忘却の方に押しやって客観的な科学を装って出発している。これは一種の欺瞞であるというような言い方を北海道の大学で教えているある先生が論考で発表し、最近はその本も出ている。社会科学では「隠蔽」というのは、あえて学説史の中で隠すという事実が問題になってきていますから、こういう問題を避けては学問意識も成り立たなくなっているというところがあります。

——ヴァールブルグ研究所による歴史と記憶の発見

意図的な忘却ではなく自然の忘却というのは当然ありまして、記憶も記憶というメカニズムがあって、努力すれば記憶ということはできるのであります。例えば、タモリが50の物の名前をあげて集中したらパッパッとと言える。記憶というのは記憶術が今や問題となってきた。記憶術というのは、普通の人はタモリがひけらかすためにテレビでやっているようなことだと思っているふしもあるけれども、10年くらい前に『記憶術 (The Art of Memory)』という本が翻訳されている。これはヨーロッパのイギリス美術史家であるフランシス・イエイツという女性が書いた本です。この本を読めば受験戦争は突破できると思うでしょうが、それとは全然関係なくて、いわゆる精神史、思想史の本です。アビ・ヴァールブルグという人が始めたヴァールブルグ研究所という、もともとドイツにありロンドンに移った

研究所ですが、ここで勉強したイエイツの成果であります。私も『本の神話学』という中に入れた一章で、このヴァールブルグのことを取り上げたんですが、これが20年以上も前ですから、だんだん自分でも何を書いたんだろうなんていう状態にあるわけで、忘却によって浸食されているということであります。このヴァールブルグという人はドイツの有名なヴァールブルグ銀行の2人の御曹子で、兄は美術史を独学で勉強し始めていた。銀行の御曹子であるから、勉強するのに大学なんかに行く必要は全然ないわけで、欲しい物はいくらでも手に入るわけです。今も、本当に財力があれば大学に行かない方がおもしろい勉強ができるのではないか、という時代になってきている（今日は10周年記念でありますから、こういう発言はなるべくしないように努力しますが）。そういう幸せな人だったわけです。そして、弟と契約を結びまして、「俺は銀行家にはなりたくない。だから家の管理権を全部お前に渡す。その代わり美術史を勉強したいので、必要な本や資料を買うために資料代は全部そちらが払ってくれ」、というような交換条件で自分は財産請求権（継承権）を放棄したわけです。後になって弟はだいぶ後悔していたらしい。毎年何億となく、どんどん本を、またはルネサンス前後の絵などを買う。彼が集めた資料というのは古代から中世、それから特にルネサンス前後に渡っての本やエッチングなどの版画は、美術史における価値と関係なく、本版画を含めていわゆる歴史が取り扱わない領域の、芸能から生活の形態とか非常に幅広い範囲に渡っている。またルネサンス期のお祭りに関するものだったら何でも集める。それから、いわゆるアクロバティックに関する物だったらいくらでも集める、という形で集めた資料を中心にヴァールブルグ研究所というのを作った。そこで勉強すれば、普通の公的な歴史の中から、正統的オーセンティックからこぼれ落ちてしまった記憶の材料のような物が集まる。本の集め方も、占星術からフォークロア、人類学、宗教学、オリエント宗教など、あらゆる分野をほとんどカバーする。その範囲は今日の人類学がカバーしている範囲より

もはるかに広い。神秘主義からヘルメス学、隠れた伝統、とそういうようなところまで収集していたわけです。現在ロンドン大学の付属施設としてあり、行けばすぐ見せてくれるので、ご覧になればおもしろい。彼がやったことは、全体から落ちこぼれた歴史情報を再編成するということです。彼は途中からノイローゼ気味になりまして、30年代の初めに亡くなったわけですが、個人的には不幸な生涯を送っている。彼の書いたものは、本という形では出ていませんが、最近になってその著作集がドイツで出始めているということでございます。

このような方法を使って仕事をした最上に知られている人が、エルンスト・カッシーラーです。カッシーラーは日本語でずいぶん翻訳が出ていますから、よく知られています。カッシーラーは人類学を対象とするような材料をどんどん使って『象徴の形式』という本を出した。それからルネサンスに関して、それまでと違った見方を示したエルヴィン・パノフスキーという人たちが、そこで勉強してヨーロッパにおける「隠れた伝統」というものを発掘した。その成果は日本語でも確かめることができる。

ナチの迫害が始まると、ユダヤ人の銀行家の倅が作ったものだから、ろくなものではないということで、ナチの監視の目が光って、それをロンドンに移す。こういうことが行われて、40年代初めだったと思いますが、ロンドン大学に移ってヴァールブルグとカーターズという2つの分校が合わさって研究所になったわけです。そこでイエイツがそういう学風などを引き継ぐ。ですから図書館そのものが、すでに著作であるというようなそういった形になっているわけです。図書館と言えば、図書館法で分類することが普通でございますが、ヴァールブルグ研究所は全然そうではなくて、戦後所長をやっていたエルンスト・ゴンブリッジという人が説明したのですが、ヴァールブルグの本の並べ方というのは、初めから分類して大きな分類や小さな分類に分けるというのではなくて、タイトルが関係なくとも内容的に非常に近い本を集めていく。ゴンブリッジの言葉で言う「in the

good neighborhood』という、本そのものが持っている親近性を集めてだんだん広げていく。そういう集め方をしているわけですから、これからだんだん浮上してくるような「知の体系」がわかるというものであります。

その形を与えていったのは戦後の研究者で、イエイツはその代表的な人であった。ですから、彼女が記憶術と言ったときには、ルネサンスの記憶術であります。短い時間に説明するのは不可能でございますが、この場合の記憶というのはいわゆる印刷術が起こってきてからはだんだん後退してしまった、ある種のものの考え方です。そういったものを通して別のコミュニケーションを作り出す。印刷術が始まって再現ということが非常に簡単にできるようになってからは、だいたいすべての事実を文字の上に表せます。しかし文字の形ではなかなか入らないような曖昧なもやもやした記憶のことです。そういう記憶は全部落としてしまう傾向があった。余りにも単純化しすぎになりますけれども、人間のコミュニケーションの歴史は、もともとはオーラルトラディション、口頭でコミュニケーションを行うというのがそもそもの始まりであったわけです。それがいわゆる民謡とか歌謡とか、歌謡を吸収して出来上がった叙事詩的なものの伝統に移行する。そうすると、大事な記憶とはオデュッセウスでもユリシーズでも、話の中にいろいろな土地の記憶や様子がどんどん詰め込まれてリズムとともに伝えられる。活字は時間を止めることができる、つまり読んでいる途中で止めて考えることはできるが、口頭の伝承の場合は流れていくリズムの中で伝えられるインフォメーションというものも入るから、活字とはまた違って来るわけです。伝える人の調子やいろいろな要素がその中には加わっていますから、活字にするには重要な部分をどんどん落としていかななくてはならなかったのです。活字以前の音声に関してはちょっと疑問が多いという単純な考え方から離れて、音声を中心とした身振りを伴うパフォーマンスや身体化された記憶、例えばシャーマンがお告げを告げるときも、それはある種の知恵がシャーマンである人間自体を媒体（メディア）

として、コミュニケーションが成り立っているという考え方が成り立つようなインフォメーションがあったということです。活字そのものの一元的な性格を補うのに挿し絵を入れたりして、いろいろ工夫してきたわけですが、今日においてはマルチメディアの可能性が広がってきていますから、オーラルコミュニケーションの時代にさしかかってきているわけです。知識の組み合わせといういわゆるヘルメティズムという名前で、ヨーロッパ、エジプトに起こった占星術において、独時に発達して展開したアストロノミーとアストロロジークがルネサンス早期をきっかけにだんだん別れる。アストロロジークは学問（自然科学）に入ったが、アストロノミーはいかがわしいものという2つに別れてしまった。けれども、占星術の場合は現在で言うと、星占いにさそり座などいろいろな形で図像を使って説明しているのは、もっと豊富な言葉と非常に積み重なったニュアンスをも含めて伝えられる知恵というものが存在したということを示しています。占星学的な考え方に含まれている我々が失った感覚に近づこうというものとして、具体的にはジョルダノー・ブルーノという人が、太古の知恵に達するために、記憶の構成の仕方、言葉の組み合わせ、図像の組み合わせをヴァールブルグ研究所の資料を使って再構成した。

——記憶を保有する場所としてのモニュメント

そうやって明らかにしていくと、シェイクスピアの舞台構成はヘルメティズム的な仕掛けを導入していることがわかる。我々は、舞台は舞台でただの建物だというように長い間考えてきましたが、けっしてそうではなくて、建物そのものの中に宇宙の星や何かの影響が投影するように、いろいろ焦点を当てられたりして存在しているのです。シェイクスピアの時代の劇場は、そういうようなところがあった。その他には、フランス革命少し前のフランス南部のアルケスというところを中心に、ルドゥーという人がやはりそういった劇場を設計したりしたことは、今日の建築史の中では

非常によく知られています。ですから、劇場というものは宇宙の構造を反映するという仕掛けを持っている。最近、鈴木忠志という人がシェイクスピア劇場を再現すると言って、大久保にグローブ座という劇場を造ることを提案して、それを建築家の磯崎氏に頼んで設計してもらった。また、水戸の芸術家が、シェイクスピア的な意味で占星術的な問題や構造を反映させて劇場を造った。だから、建築そのものが隠れた記憶のメッセージを送る仕掛けになっているということを、鈴木忠志もフランシス・イエイツを引用して説明しているし、磯崎氏も同様に言っている。最近、磯崎氏と話していたら、今年は遷京都1200年で京都に音楽ホールを設計しているそうで、これはアジアの風水論の構造を反映した劇場です。東西南北、白虎・玄武・青龍・朱雀というものを反映している。色も反映している。磯崎氏に、「ある時は占星術、ある時は建築家で、頭の中で戦争が起こらないですか」と聞くと、「両方はきちっと分けていますから」と言う。

これがアジアの伝統で言えば、例えば曼陀羅の中にはそういったものに近い、文字だけで構成するのではなくて図像も使うアナログ的な要素とデジタル的な要素が含まれている。ですから、デジタルとアナログを使いながら我々の日常の感覚では到達できないようなりアリティを作り出す。ヨーロッパのヘルメス学には、ある種の知恵に対する手掛かりとしての曼陀羅および瞑想という立場に対するものがある。我々の周りに起こっている記憶術を成り立たしめた元の原理、アジアで言えば仏教のコスモロジーを示していると言われている曼陀羅につきましては、一昨年東京の日本武道館で千像供養というものが行われた。これは、地面に、下からの照明で浮き上がるような曼陀羅の絵を描いて、その上で千人の坊さんが曼陀羅のいろいろな部の中に配置されて、この人間が立ち上がったたり座ったりして般若の転読と言う雑音を立てながら般若経を読む、と言った混沌とするような演出をし、ロックやフュージョン的に曼陀羅をやらせた。すると、観客が沸きに沸いたということがありましたが、それも曼陀羅そのものが

持っている構造を立ち上がらせるのを音の組み合わせによって、宇宙図という曼陀羅の絵の上でやるので、曼陀羅の図が音を媒体に立ち上がるというイメージが湧き起こってくる。そのフュージョンは大変成功しましたけれども、曼陀羅というのは普通の若者たちが入って興奮するようなところに今や置かれている。こういった曼陀羅や唱名は、かつて人間がそういう状態の中に生きていたことを呼び戻すという一種の記憶術である。

ピエール・ノラという歴史家が『記憶の場所』という本で、19世紀のフランスは記念物をやたら造ったということを書きました。教会的な秩序に対して市民の秩序を打ち立てるということで、やたら新しい銅像を、特にナポレオン3世のときに盛んに作った。パリのオスマン男爵がパリを作りかえた。同時に今度はいろんなところに記念の建物を造り、教会に代わる建物としてオペラハウスなど、いわゆる新しい世俗の建築物、記念物を建てるのが大はやりになった。そういう「もの」に記憶を託して、その時期はこういうような輝きに満ちていたということを示すためのよすがとして、記念物がたくさん建てられた。ローマは非常に長年に渡って記念物を建てており、イタリア人は永遠のローマという誇りを持っている。

私は15年ぐらい前のあるとき、まだ市電や都電が走っていたときに、電車の中でイタリア人の夫妻に話しかけられました。彼らは東京へ観光に来ただけけれども、誰も知っている人がいないから、ちょっと教えてくれないうんです。その日は暇だったから、一日中浅草とかいろいろ連れていきました。いろいろ回った後で、イタリア人夫妻は「とても面白かったけれど、日本っていうところはモニュメントや記念物のないところだね」と言いました。私は「いや、記念物を作ってもすぐ焼けてしまうからあまり作らないんだ」というように言ったことがあります。そういう意味では、日本での記念物というのは何なのかということをもう一回考え直してみた方がよいなとその頃思ったんですけども、私はそのことを忘れてしまい、その点についてはあまり深入りしなかったのです。

そういった意味で、ヨーロッパの人間には特に記念物をオブセッションみたいに感じ、思い入れの激しすぎるところがあると思うんです。それでスターリン像とかレーニン像とか作っては壊し、作っては壊しと最近までやっておりましたけれども、それらを今日の歴史家たちは再構成し、その時代感覚をどのように表現したかを調べる。そうすると、フランス・イエイツのような立場と、いわゆる歴史的なクロニクルに比較的近い立場のにだいたい分かれていくと思うんです。

—人類学の視点から見た記憶の問題

イエイツの研究した記憶術の考え方は、どちらかというともしろ神話に近いということが言えると思うんです。私たちは人類学を専攻していますから、すぐ日本や欧米以外の事例を考えるんですが、例えば日本でも非常によく知られているマリノフスキーは、人類学をやっている人も全然関係ない人も一度は読んだことがある。その中で特に有名なのは、中央公論社の「世界の名著」の中に入っている『西太平洋の遠洋航海者』——Argonauts of the Western Pacific——というのがあるわけですが、これは経済人類学をやっていると称する栗本慎一郎さんなんかも「交換がすべての始まりだ」と言いますが、その「交換の原理」の例としてよく使われるテーマです。これは、トロブリアンド島の島民たちが大きなカヌーを作って交換の旅に出かけるというサイクルです。それをギリシャ神話の中でアルゴ船と言いますが、彼らがそのアルゴ船に乗って「金羊毛」というのを探しに出かける集団の神話的なイメージにも近いからアルゴノーツというタイトルになったわけです。この航海を「クラ貿易」といい、経済的な意味はいろいろな本に触れられています。その中でおもしろいのは、船の先の方にある一つの木の板でパネルが掲げられている。このパネルは単なる飾りではなくて、交換のための航海を一番初めにやったと言われる神話的时代の神話的な人物がどのようにしてこういうことを始めてどのような航海

をし、その中でどのような自然現象に会い、どういう種類の人間に出会ったかということをちりばめられ象徴化されて彫物になっているわけです。それが一種の航海図みたいなものになっていて、一つ一つの航海は、今の人間がやっているように見えるけれども、神話的な時代に起こったことを再現するということになる。そうすると、この神話の時代の記憶というのがあって、今の人間がやっていることだけでも、それがそのうちに神話の時代の記憶になっている。結局演じている人が神話を通じて本当の意味が明らかになるような行為、つまり始まりの行為の再現であるように見えながら、始まりの時代に合一するための手本、テキストとなっている。

オーストラリアの原住民、アボリジニが非常に古い時代である太古を称するのに「夢の時（ドリームタイム）」という。そういうような言葉を使って、ディジェリズーという楽器（キーの中身は白蟻に食われていて外側だけが残っているが、それに息を吹き込むとボンボンと異様な響きがする）でリズム化して踊る。これはある特定の地点で行いますから、例えば都市化によってそこにスーパーマーケットが建っても、ある時間になるとその人たちがずーっと入ってきて、その中でドンドンドンとやる。つまり、コミュニケーションをするわけです。そうすることによって体の中に失われた一種のリズムというものが沸き起こってくる。そういうことを通じて、半ば夢遊病みたいにして自然の時間から途切れた過去とコミュニケーションをやるというようなことにも実際は近くなってくる。そういう例は各地で行われている人類学の研究が示す通りたくさんある。ただ、人類学者がそういう材料を集めて有効に使っているかということになると、意外と人類学者はそういうことを有効に使っていないと言えるかと思います。

——コミュニケーションの中に隠されている記憶

こういうわけで、過去というものを「隠れた次元」、つまりクロニクルに取り込まれることができる事件として語られる過去とはちょっと途切れて

いるように見える次元でとらえる。それが姿を現すとき、たいていは蒙昧な連中の迷信であるというように片付けられてしまいますが、そうとばかりは言えない。違った種類の過去とは何かと言いますと、ちょっとその前に、このところメディア論が非常に盛んになって普通マクルーハンというのがメディアの革命を起こしたと言われているけれど、今日でいうとマルチメディアを含む電子メディア、少しさかのぼると日本ではメディアとして漫画メディアが出版では最前線に出てきた。その後でマクルーハンのいうところの文字革命が起こる。しかしその文字革命が起こる前は、中世の本でも皮の上に書くなどして、一人一人が手で描く図像、画像が文字のコミュニケーションと並んで行われていた。中世の普通の人々は圧倒的に画像に慣れていて、字を読める人はほんの数人に限られていた。そういうことは日本のように古代から漢字文化圏に入ったようなところでも、漢字文化は非常に限られた人たちの間にとどまっていた、絵巻物とか曼陀羅といった図像的なコミュニケーションが非常に盛んに行われてきた。その前を探てみると、例えば、歌・歌謡といった中から文字に吸い上げられ『万葉集』になったとか、それから中世の始まりの『梁塵秘抄』というような白拍子の歌に含まれているような歌集に、いわゆる踊りとともに歌われた歌謡などが集められたとかそういうことがある。その他、あの鉄砲伝来で知られている種子島ですが、その南に池があり、正月にその近くの漁村を訪れたことがあるんです。正月のときは漁民たちが集まって歌うのですが、使われる言葉、リズム、メロディを総合してみると中世の歌謡の要素が非常に色濃く残っていることを音楽史の研究者たちが指摘をしていて、それは多分正しいだろうと思うんです。なぜかと言いますと、その港はちょうど隠れた入り江になっていて、伝説では船を使って移動する集団の港であった。漁民たちはそういう人たちに非常に関係が深い、あるいは直接の子孫かもしれないというようにも言われている。そうすると正月に歌われる歌謡そのものが、非常に重要な歴史のメディアになってくる。そういう

ような例はあげればいろいろ出てくると思うわけです。だいたいそういうようなことを頼りにして、民俗学、フォークロアは、書かれたクロニクルではさかのばれないけれども、残っている祭り、パフォーマンス、いろいろな儀礼からそういうものを手掛かりに時間をさかのぼり探っていこうとする。だから過去との対話というのは無限にあると思うんです。

それから例えば、人類学の調査で私が滞在したインドネシアにフローレス島という島があります。その島の家を見てますと、この島民にとって家そのものが過去・始まりの時にコミュニケーションする手段となっているわけです。それはどういうことかと言いますと、一番の始祖伝説では、その島の最初の先祖は船で漂って到着した。その当時は洪水伝説のように、洪水の後で島の頂点・頂上だけが浮いていて、そこへ船が寄りつき野菜を作ることなんかを始めた。しかし、夜になりそこが留守になると野菜が盗まれるので、見張っていたところ、ある動物が天井から木を通じて天と地をつないでいた。そういうことは船の神話ですから、おかしいんですけども、船にはマストがあり、その上からそのままのびて天につながってしまった。だから、天と地はつながっていたんだという、これまたよくある神話なんですけれども。それで、最初の始祖が怒って木を切ってしまった。そうすると、太陽はずっと上ったままで洪水が引き、地上に子孫が繁栄するようになった。そこで現在立っている家の構造もその船を反映しているから、入り口には船のパネルが貼ってあったり、また入り口としてベランダが形式になっておりますから、ベランダに上がってきて家の中に入るときにも入り口は船のパネルがついている。それから家の中にも船を思わせるものはいろいろあります。つまり、普通の人が住んでいる家自体も神話的な時代を反映しているモニュメントだということもあって、その周りで行われる儀礼も最初の時間（闇が支配していた時代）に戻る。ですから、やっぱりこれもメディアといえればメディアであると言えます。

その他に、我々が言語コミュニケーションをする時はわかりやすい言葉

でいうけれども、逆にわかりにくい言葉で表現するようなことがある。私が調査したある島もそうなんですけれども、その島に10年ぐらいいなければ、このように隠れている言葉は絶対にわからない。比喻が比喩を呼び、メタファーがメタファーを呼ぶ。5つぐらいの層を成しているから、初めの上の言葉だけ聞いたんでは何を言っているんだか全然わからないということがあるんです。それはエチオピアでもワクという部族がそういうことをやっているということをアメリカの人類学者が本にしています。だから普通の若い人たちには全然わからないけれども、年寄りが喋っていると全然別の意味が出てくるという、そういった言葉の重層性を利用してある種の記憶を閉じ込めておく。文化がもっている装置として意図的に言葉を使い、記憶が隠されている場合もある。すべてが露出しているわけではない。こういうようにして今、記憶のメディアがいろいろな形で文化の中にちりばめられているということを申し上げようと思いました。

—閉じ込められた情報や記憶を取り出す

そういうわけで、記憶というよりも凍結された情報といってもいいような情報が文化の中にいろいろとあるわけです。あるいは気がつかないようなものがあるのです。先程申し上げたようなオデュッセウスやイリアッドを子細に検討したロードという人がいます。ギリシャの叙事詩の言葉とギリシャの現在の民謡とを対比しながら採集して、民謡の方から探っていくと、このテキストに隠されていた意味が露出してくる。そして、音の要素が非常に重要だということをこのロードという人が明らかにしたことがあるわけです。そういうような叙事詩はとにかく過去の情報を閉じ込める。そして、過去を現在に呼び戻してことほぐ全体の劇場みたいなものである。そこに聞く人が熱中してその中に入ることがもう劇場の中にいるのと同じような状態になるから、芝居のために書かれたテキストと、実際の舞台とは全然違うようになることがあるように、いろいろな記号的な要素が閉じ

込められるということは、別のものになる可能性があるということが言えるわけです。

このようなことはいろいろな形で起こるわけですが、我々が自分たちを振り返ってみても、情報というものにはいわゆる「取り出される情報」と「取り出されない潜在的な情報」というものがあると思います。情報とは何かということを語り出せばきりがないのですが、自分の育ってきたことでも、自分に対して持っているその人の現在という文脈で役に立つ目録がだいたいあって、その中で我々は生きている。いろいろな経験を過去にするけれども、その記憶というのは断片のままとどまって形を成すことがない。我々の大半はだいたいそういうものに形を与えないまま生涯を終わってしまうことが多いと思うのですが、その情報自体が、我々が体を動かしているいろいろなことをやっているうちに勝手に結びついている。各々勝手に結びついて形を成してくることがある。

自分の例を挙げて非常に申しわけないのですが、福島県の大沼郡というところにある、只見ダムの近くの小学校をただでもらって使わせていただくようになりました。そのきっかけというのは、考えてみると、個人が潜在的に持っている情報が勝手に動き出したというところがあるわけです。それは何かと言いますと、よく聞かれるのは「なぜあなたは福島県の山奥に小学校をもらうような変なことをしたのか」ということです。動機というのはなく、強いて言えば、縁というしかない。それはどういうことかといいますと、ある時になって、家に本が集まりすぎたというか、本を入れるには家が小さすぎたのかわかりませんが、爆発しそうになって何とかしなければだめだというので、いろいろな情報を集めて、福島県の山奥なら手頃の値段でなかなかいいところがあると言われて行ったところ、ちょうど家を建てるのに見晴らしのいいところがあって、そこから下を見たら小学校の廃校らしいのがある。聞いたらあと2週間で取壊しになるというので、すぐ村長さんのところへ3日間続けて通いました。村長さんもあきれ

た様子で「差し上げましょう」と言うので、ただでいただいたわけであり
ます。ということで、3年前にオープニングをやって、その時にその小学
校で以前に教えていた先生で生存している先生や卒業生などに来ていただ
いて、一緒に小学校の校歌を歌うという感傷的なこともやりました。その
時にみんなで話していたところ、歴史の記憶とはやっぱりおもしろい、メ
ディアがうまく適切に解説されたなかなかおもしろいことが出てくるとい
うことがわかったのです。

一つは、そこに最後から2代目の校長先生が来ていました。佐治先生と
いうので、「私は中学校で教わった生物の先生で、非常に印象を受けた佐治
という会津出身の先生に習ったことがあります」と言ったら、その校長先
生は「それは私のおじですよ」と言うのです。北海道の網走中学校で教え
ていた先生が、ここの大沼郡昭和村、そこで私が学校をもらった、その
校長先生のおじさんであったというような、「これは縁というより他はない
」と思ったけれども、縁だけでは科学性に欠けるなということもあります。
我々のライフヒストリーにはそういった捨てられた何となく気になる
という（気になるということがモチーフだと思うのですが）ことがある。
「会津」と聞いて何か気になったというところがそもそもの始まりだけれど
も、情報そのものは勝手にある程度動き出している。年を取ったからそう
いうことをみんな忘れてしまったから、残るのがそれくらいしかないとい
うことかも知れませんが、勝手に立ち上がってきてしまっている。私はそ
れに乗っただけだという感じです。私の個人の歴史の中で記憶というもの
が断片化されたヒストリーの情報となり、不完全な情報だが物語性を少し
ずつ獲得して、それで物語になってしまって、その物語が私をつかまえて
しまった、そういう表現もできるのではなからうか。「情報が自分をつかま
える」というのは、非常にいい表現だと思います。私が西アフリカで調査
したとき、昔話を集めてみますと、非常に私が好きな始まり方は、「アソン
タッタヤッパ」というんです。これは何かというと、昔話が勝手に立ち上

がり、走り出して、その結果つかまえたのがうさぎであるとか、そういった具合に話が始まる。「昔々あるところに」というよりもよいなあと思っていました。個人の情報の話も、断片化していた私の個人の過去に属するものが立ち上がって私をつかまえ、その結果学校をもらった。私には良すぎるような話なんですけれども、そういうわけでその学校のオープニングに絡む話をもう一つします。最初の日、村の人を招待してバーベキュー大会をやりました。サントリービールの佐治さんに、ここは東北の佐治ゆかりの地というので20ケースくらいもらいまして、いくら飲んでもらっても大丈夫ということで、そこに来た人といろいろ話したんです。そうすると、その中の一人がおもしろいことを言いました。実はこの小学校は昭和12年に建ったんだが、自分の父親が地区の代表であり責任者であった。当時小学校を作るのは半分村の負担、半分地区の負担だったけれども、昭和12年ぐらいに金があるわけがない。それで途中で柱が足りなくなって、裏の山はもともと村の入会の地だったから、親父も子供の時の感覚で裏の山へ行って木を切ってきて、知らん顔をしてそれを使って建てた。それがばれまして、親は捕まって、山一つ越えたところの刑務所におちこまれた。それで母親が2年間自分を背負って弁護士のところに通って、いろいろやってもらい、2年経った時に戻ってきたというようなことをちょっと話してくれました。ということは、この小学校の歴史というものを考える場合に、学校そのものが記憶の媒体になるテキストであるということが目の当たりに見えて、なかなかこれはおもしろいな、学校一つと言えど、馬鹿にできないなというようなことを感じたわけです。その学校に関しては他にいろいろ、木造校舎だからおもしろいと我々は言ったわけですが、鉄筋だったら今やそんな記憶なんて絶対込められない。鉄筋に塗り込めるのであったら、人を殺して死体を塗り込めるぐらいですが、地震災などあるとすぐわかる。震災の話は非常に深刻な話ですから、こういう例としてあげては申しわけないのですが、ちょうど地震が出てきたからついでに言いますけ

ど、地震に関連した話が今朝新聞に出ていました。私もよく知っているアウエハントというオランダの日本学者の、「鯰絵」を研究した本のことです。「鯰絵」は、文政の京都や安政の江戸の大地震など、地震の後に必ず広まった。ふざけ半分の「鯰絵」は何を目的にしているのか。地震避けの御守り、2番目は被災者の心身の癒し、結局地震というのは鯰が起こし、すべてをひっくり返すから、ある意味では徳政みたいなところがあって、借金棒引きとかいろいろなプラスの面があるというようなことも含めたユーモアが込められている。それから3番目は弱者救済のキャンペーン。金持ちの批判、それから鯰＝地震に打ち勝つ、というようないろいろな意味を込めたユーモアの感覚でこういうようなものがいろいろ売れた。この図像からアウエハントが地震の時の感覚（地震の神話みたいなもの）を解説して、その当時の人々の心性（マンタリテ）というようなものを再現する手がかりにした。それは普通の文字では失われてしまうような感覚で歴史の表面には残らない。

—歴史に埋もれた記憶を立ち上げさせる

今年の4月頃本になりそうですが、明治・大正・昭和に渡る日本の近代の中において失われた一種の記憶を再構成しようと思って、連続で3年間書いてきたものがあるんです。「日本の近代」ということを根源的に考え直すには、第二次世界大戦の問題を考えなければならない。例えば、日本が負けたという事実から出発しないで、勝った方の見方とアイデンティファイしようというのが戦後日本の生き方であったけれども、あのとき負け方の技術を開発すべきなのに、なぜ開発しなかったのだろう。日本がその前に負けたのは、日本の半分が負けた明治維新であった。明治維新の時には負けた方のかかなりの部分の人が負けたという事実から出発した。勝った方は薩長型のピラミッド構造の社会を作っていくというようなことをやったわけですが、負けた方は負けた側の生き方を追求した人がかなりい

る。戦争にずっと向かっていくような道とは全然違って、システムから一歩外に出るというような見方であるから、21世紀の日本を考える場合にはかえってこういう生き方をした人の方が頼りになるのではないかという考え方や、また日本の近代の記憶から消えてしまった幕臣の行方をちょっと追ってみた。そうすると、気がついてみたらもう4年経っていた。浦島と同じです。山口さんはこの頃本を出さないから、どこかの建築家みたいに、実は10年前に死んでいたんだと言われるようなのと近い状況になっていたんです。

ちょうどそのころ静岡県立大学というところに移った。静岡が日本全国を支配した時期は徳川家康の駿府の時以来いつだろう、と考えてみたら徳川慶喜が静岡へ来た時に、沼津に一緒に幕府の「蕃書調所」というある種の研究所みたいなものも移って、沼津兵学校というものを作った。その兵学校の教授というのが西周とかであった。その兵学校は實際上、日本の近代において最初の総合大学であった。そういうことで、教官なども江原素六のリーダーシップたるやもう大変なものだったのです。そのうちの例えば中根香亭という人は、幕府の旗本であって、ものすごい漢学の素養があった。その兵学校で教授をやっていたけれど、3年経ったらあの明治維新新政府が嫉妬して全部教官を一本づりして兵部省に学校そのものを召しあげてしまったわけです。ですから3年しか存続しなかった最初の総合大学ですけれども、その中で香亭は『香亭雑談』とか漢文の名文の本を出したり、漢文によるいろんな時代を反映するエピソードを書いた本を出したわけです。彼は知的にも非常に魅力のある人だった。その証拠に、私が今、香亭をちょっと語れる理由としては永井荷風の『偏奇館日常』という日記です。それを先週用があって読んでいたんですが、その中に中根香亭がしばしば出てくるんです。なぜかと思い、「荷風全集」をひっくり返してみたところ、荷風は至るところで中根香亭のような江戸の時代を代表するような学者、それから文人を兼ねている人間を好んで書いている。荷風のお父

さんもやっぱり幕府の旗本だったんです。荷風はだいたい3つの作品の塊があるということで、一つは『ふらんす物語』『あめりか物語』といったような洋風のものと、反対に『溍東綺譚』みたいな江戸情緒に埋没したものです。ところがもう一つ真ん中に森鷗外の歴史小説『大好きだったこと』に見られるような、江戸的な生き方の知性に対する限りないあこがれの念を持っていた。その対象の一つが中根香亭であった。中根香亭がおもしろいのは、その後兵部省に召しとられて『日本兵要地誌』という地理の本を書いている。最後にはそれは彼の名前をつけて出さなかったけれども、明治10年の「西南の役」のちょっと前、その時は彼は少佐で、大佐が「これ削れ」っていう時に「削らない」と大喧嘩して、それでやめてしまったというぐらいの気骨のある人だったわけです。そこで、その中根香亭はそれから後は浪人をしていたんですけど、「金港堂」という出版社の顧問になって「金港堂」が出す雑誌『都のはな』というような雑誌の顧問をやっていた。そこで非常におもしろい良いネットワークを持っていたわけです。ネットワークの中で彼はいろいろ仕事をしたり、ともに遊んだりしていたんです。けれども明治24年ぐらいになったら「もうこの世に飽きた」と言いまして、奥さんは前に死んでいるものですから、自分の持っているものを全部親戚に譲り渡し、自分は漂浪の旅に出かけた。それで時々東京に帰ってきたりして、ちょうど山下清がしたんじゃないかという感じでスケッチに行っただけは文章を書いてあげる。それで何日間か暮らす。漂浪の旅に出るときに自分の書籍や何かを全部分けてしまった。最後に死ぬ少し前に、親戚で自分の後を託した人に「僕が死んだら骨は灰にして、それを野山に撒いてくれ」と言う。ですからもう今日一番カッコいい生き方を全部先取りしたというところがあるわけです。明治の終わり頃に、自然葬の考え方を先にやっているんです。しかし、中根香亭はほとんど忘れられていて、全然歴史の近代史の記憶にとどまらないのです。もう漱石の100分の1でも表現されていればいいですけど、中根香亭については本が一冊もないです。ところが

驚くべきことに、一昨日、「静岡県の沼津で講演せよ」ということで県庁の人たちに向かって講演をしたんです。ちょっと時間があつたから明治資料館という兵学校の後に建ったところにちょっと訪れました。そうするとびっくりしたことには、そこの学芸員の人がやはり中根香亭の本を、和綴じの本ですけど、乏しい予算の中から買い集めて持っていた。収蔵庫の片隅にあるのを「これ何だかわかりますか」と言いますので、私は「知らん」と言いました。「これは中根香亭が使っていた文机なんですよ」と言うのです。「それがどうしてこんなところにあるの」と言ったら、中根香亭が遺産分けを親戚にした時、兵学校の教授だった乙骨太郎に渡ったということなんです。これもまた個人情報が立ち上がるというもので、この乙骨先生というのは、麻布中学の先生にその人の孫である同僚がいたんです。打ち捨てられたような情報がまた立ち上がってきた。あちらでぶつかりこちらでぶつかり、そのうち私が倒れるのではないかと思うくらい、そういったものが目の前に飛び出してくる。そういうような過去の記憶というものが立ち上がるというような機会に一昨日遭遇したんです。「これからも香亭についてもう少しまとめて勉強したいんだけど」と言ったら、「それでは先生、清水市ですね。クリーニング屋さんがあつて、そこの店員さんなんですけども、50歳くらいの人で中根香亭についてこれ以上知っている人がいないというぐらい情報・資料を集めているという人がいます。」

町の中にそういう人がいて、大学というのは大したことをやってないな、いわゆる公の推薦する記憶しかとどめていないなというのが私の感想です。だから公の記憶から打ち捨てられたものを、そういう人が拾っているというので、びっくりして腰を抜かしそうになったわけです。けれども「歴史と記憶」というものの例は意外と我々の周りに転がっているんだということでありまして、決してヨーロッパばかりをありがたがっているわけではないということで、今日は話をしました。こういう記憶の問題をやるにはどのような研究スタイルがあるかということで、目録・カタログをた

くさん用意してきたんですけど…。一つのことにとだわると，なかなかいろんなことを喋れない，ということがわかったところで話を終えさせていただきます。